

北海道のミンク養殖業の歴史と現在への影響

宇仁義和（東京農業大学オホーツクキャンパス@網走）

ミンクは、テンやイタチの仲間の肉食動物で野生種は北アメリカに住んでいます。毛皮はやわらかで美しく、北海道では今から70年ほど前に本格的な飼育が始まり、1958年の皇太子ご成婚では美智子現皇太后がミンクのストールを身に付けたことが注目されます。飼育は農家が小規模におこなったほか、1960年代からは水産会社が釧路や根室、網走地方で大規模な飼育場を経営するようになりました。そして30年前のバブル崩壊まで、北海道のミンク養殖業は地域によっては主要な輸出産業として成長していったのです。その後、1990年代には飼育場が次々と廃止され、2000年代には北海道から飼育場は見られなくなり、ミンク養殖業は過去のものとなりました。札幌では藤野や手稲に、千歳の近くでは、北広島や美々に大規模な飼育場がありました。

野生のミンクは黒に近い茶色の動物です。これを飼育改良している途中で、明るい茶色や白色、青みがかった灰色の毛皮が生まれました。欧米では野生に近いダークカラーが、日本では例外的に青灰色のサファイアと呼ばれる品種が好まれました。野生化したミンクの色は、道東では先祖返りしたこげ茶色です。ところが千歳では明るい色の個体が普通です。この差は、飼育に使ったミンクの血統の違いによるものかも知れません。

北海道では飼育が始まった頃からミンクは脱走を続け、現在も各地で生きた姿が目撃されています。彼らは魚が好きで、川の近くに住み川魚や小動物を捕って食べているようです。その生態は、ちょうど絶滅したカワウソのようです。このため養魚場などでの被害が心配されましたが、いまのところ大きな被害は無いようです。一方、昆虫や寄生虫など微細な生きものへの影響について、詳しいことはわかっていません。これからの研究テーマになるのでしょうか。



左：ミンクのかご 中：網走にあった飼育場 右：現在もバス停にミンク場の名前が残る